

プロメテウス解剖学アトラス 解剖学総論/運動器系

坂井 建雄, 松村 譲児 監訳

＜書評者＞ 岡部繁男 (東京医科歯科大学大学院・細胞生物学)

『プロメテウス解剖学アトラス 解剖学総論/運動器系』はドイツ Thieme 社が 2004 年から 2006 年にかけて出版した全 3 巻からなる肉眼解剖学の教科書の第 1 巻の邦訳である。タイトルからわかるように、第 1 巻は人体構造の中で特に運動器(骨と骨格筋)に焦点を当てたボリュームであり、続く第 2 巻が「頸部/胸部/腹部・骨盤」、第 3 巻が「頭部/神経解剖」として順次刊行される予定である。

原著の巻頭言によれば、この本のタイトルであるプロメテウス(ギリシャ神話に登場する。人に火を伝えたことによりゼウスから罰を受けた神である)は「先に考える者」を意味し、医学教育においてこれまでにない「理想的な」解剖学アトラスを作成することを目指したとされている。その名を冠したとのことである。

確かにこの本には学生の知的作業を支援するための、これまでの教科書にはない新しいコンセプトが多く見出される。まず著者が強調するように、取り上げられてい

る内容は決して網羅的ではなく、内容の重要度に応じて解説と付随する図版がよく吟味されている。特に第 1 巻は運動器が題材であり、体の動き自体の理解を伴って初めてその構造と機能の関係が明確となる。本書では関節の構造のページには必ず生体の運動と対応させた解説があり、この本を利用する医学生が両者の関連を自然に意識するように配慮がなされている。また臨床医学との関連性についても、下肢の章であれば股関節の運動と力学のページにおいて変形性関節症や乳児の股関節脱臼についての解説を盛り込むなど、随所に解剖学的構造と臨床医学とのつながりを強調する工夫が施されている。

次に私がこの教科書が優れていると感じた点として、図版と解説の統一性と系統的な理解を容易にするさまざまな配慮が挙げられる。これはドイツ人の国民性を反映しているのかもしれないが、体幹、上肢、下肢の 3 章はすべて同じ構成を取り、図版の統一性も見事で

ある。上肢の 3.10 章以降と下肢の 3.8 章以降を参照すれば、読者は手と足の内在筋群の走向とその起始・停止について容易に比較し理解することができるであろう。

最後に、この本が教科書としても解剖学実習の際のアトラスとしても使用しうる美しい図版を豊富にもつ点を強調したい。原図は画家によって描かれた精密なものであり、コンピュータ処理を駆使することで複数の関連した図版が整合性をもって配置されている。特に筋肉の浅層から深層までを描写する場合などに、その威力が発揮されている。

邦訳は国内の第一線の解剖学者によるものであり、きわめて質が高い。解剖学は医学部に進んだ学生がまず接する教科であり、この基礎段階で的確かつ能率的な知識吸収の方法論を身につけることが、その後の医学学習の礎ともなる。その意味で本書は、解剖学の学習を知的作業と捉える意欲ある学生にとって貴重な教科書になると確信する。

●A4 変型 頁 560 2007 年
定価 12,600 円
(本体 12,000 円+税 5%)
[ISBN978-4-260-00239-4]
医学書院 刊